

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 4年 7月 9日
(110号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 学塾・中之島事務局

人間学講座
第117講

「一歩踏み出せば
人生は変わる」
喜多川 泰先生



■ 大人は何のために学ぶのか

日本は諸外国に較べて「大人が勉強しない国」です。僕たちの世代(昭和四〇(五〇年代))は「とにかく頑張つて勉強しろ」と言われました。そうすれば良い高校へ行ける、良い大学に入れて良い会社就職できれば将来安泰だ、と親からも先生からも言われました。時代は変わってもそれは今も根強い。大人が楽しく学ぶ国にしたい、その思いが根底となり、今の大人のための塾の活動があります。

学ぶ大人は貴重だと思います。学ぶときは人は自分を空っぽにして謙虚でなければなりません。僕がこれまでにお会いした一流と言われる方は総じて謙虚な方でした。

大人が何のために学ぶのか? 学生の時の目的は良い学校、良い会社。それが今も「会社の売り上げのため」だとすると、学生ときから立場が変わってもその理由が変わっていないことになる。なぜなら「結果」を求めているのは同じで、手にする「成果」を得たいから学ぶ、という考え方は変わらない。これは「幸せになりたいから」という漠然とした答えにも通じます。つまり、今ではない何かの状態になりたい、と欲している。これまで結果のために学ぶという環境を自分たちは与えられてきたので「何のために、学ぶのか」の問いに結果ではない答えを持つ大人がとても少ないのです。

■ 人が美しく見えるとき

人間が美しく見える瞬間があります。腰骨を立てるとその姿勢は美しい。それは単に姿というだけ

けでなく、内側から出る美しさがあるのです。それは目には見えない「何か」ですが、伝わるのです。人としての輝きともいえるでしょう。

「転んだら立ち上がれ」とよく言われますが、通常、人はとりあえず転べば立ち上がる。問題はその後で、転んだあとと同じことをするのに臆病になってしまひ、諦めてしまうことです。私たちは頑張ればうまくいくと言われ、信じてやってきた。経営においても、頑張っているのに、それでもうまくいかないときがあります。人が美しく見えるときは、転んだそのあと、もう一度立ち上がるときではないか。経営で痛烈な痛手を負えばなかなか「もう一度やってみる」とはならないかもしれない、しかし、それでもそうするときに人は美しく輝くように思います。それは大きなことであれ小さなことであれ同様です。幼い子が父親と一緒に自転車の練習をしている光景をたまたま運転中に目にしました。何かができた、何かを達成した、という事実が人を美しく見せるのではない。自転車の練習もまた然りで、転んでも立ち上がる、そしてまたもう一度同じようにやろうとする、その姿に心を打たれるのです。リトライする姿こそ輝いている。リトライは、大人になればなるほど実はできなくなります。もう失敗したくない、となる。

塾でも、すぐにパツとできる子に感心はするが「美しい」とは思わない。でも子どもの中には、できなかった問題を再度解いてみて、「解ったと思ったのにまたできない」という子がいる。「解る」と「できる」の間には実は距離があります。これを縮めるには反復練習しかない。反復し続けそうしてやがてできる人になってゆく、それを美しいと感じます。そう思えば、僕たちは、できないことがある限り、いつでも「美しい人になれる」ということです。

■ 「感動動」と「感間動」

なんのために学ぶのか? は結果ではなく、成長のためだと思っています。人生は一回しかない。だから今回うまくいかなかったらもう一回というわけにはいかないのですから、人生の中でうまくいかないことの反復練習を行っていく、それが人の美しさだと感じています。それは「文化」ではないか。この文化を残したい。文化は人という柱によって支えられています。今の世はどうしても結果中心になっている。手に入れたものが財産なのではなく、見てきた景色こそが財産なのです。人生で成し遂げものがその人、ではなく、その人生で何を経験したかであり、何を考えて生きてきたか。見てきた景色がその人であるとする生き方には「感動できる人」かどうかだと思います。感動とは「感動動」、「感じてすぐ動くこと」、動いて初めて「感動」なのです。

本との出会い、人との出会い、非日常との出会い、この「三つの出会い」は確実に人生を変えます。その中で、「人」・「非日常」は向こうからやって来ることもある。「本」だけは自分が動かないと得られない出会いです。良い本を読んだら誰かにも読んでほしい、と思うこともあるでしょう。感じて即動くということは、本性から湧いて来るものです。即ではなく間があくと人は「自分がどう思われるか」にとらわれます。だからこそ瞬間的に動くということが重要。「感動動」と「感間動」この違いは、価値観・人生観の違い。人生において「何を手に入れるか」を大事にする価値観は間があいてしまします。その行為によって得られる結果は確実か否かを考えるからです。一方「感動動」の人が大事にしているのは結果ではなく「あり方」。どのようにありたいか? それにより得られるものにはこだわらない。学びの真の目的とは、人の在り方を磨くためにあると思っています。

(抄録 中川千都子)

《感動語録集》

喜多川 泰 先生

「一歩踏み出せば人生は変わる」

- * 人が輝くためには…、
みがけば輝く…みがくとはキズをつけること、磨いた後、光を当てる。自分自身を光の元へ連れて行く。
- * 何のために学ぶのか。
自分がどうありたいか？自分のあり方、成長、自分を輝かせること。文化を支える柱(人)になれる。
- * 教育を楽しむ。
- * 学のは、自分のあり方を磨くため。結果を求めないこと。自分がどんな人でありたいかを追求していく。自分の魂に響く人たちから学ぶ。
- * 達成のためでなく、成長(あり方を磨く)のために学ぶ。
- * 最善策を探すことにより動けなくなる。
- * 伝統は守ろうとするのではなく、油断しないこと。
- * 大切な出会い…本・人・非日常。
- * 「感即・動」…「感」だけで終わらず「即・動」が大事。
間があくと人は損得を考える。
- * 謙虚さとは、瞬間にして自分の器の中を空にできる人。
- * 繁栄の秘訣は、新しく何かをやり続けること。
- * 「こんな人間でありたい」という域へ一歩でも動く。
- * 独自性を磨く…必要大制限できる人。
- * 学ぶことで、見えてきた景色が財産。
- * 「わかる」と「できる」とは距離がある。
その距離を縮めるには反復が必要。
- * 人が一番輝いて見える時は、もう一度立ち上がるうとしている時。
- * 結果よりも、あり方が大事。
- * 転んで失敗しても、立ち上がってもう一度やってみ

る姿が輝いて見える。

* 「分かる」と「出来る」とは、違う。その間をうめるには反復することである。

* 大人が楽しく学べる国にする。

* 輝くとは、「Retry(再試行)」

* 学び続けることにより、日々の当たり前を忘れない。



第11期入塾説明会



進行 松本学副代表



「入塾体験発表」
柴原啓司世話人
井上貴子塾生



《森 信三先生に学ぼう!!》

「仕事の根本」

★ 職業の三大意義

- (一) 衣食の資を得る手段・方法である上に、
- (二) 人間は自己の職業を通して世のために貢献し、
- (三) かつ自分なりの天分や個性を発揮するという三大意義を持つものであります。

★ 個性を発揮

人は職業以外の道によって、その個性を発揮するということは、ほとんど不可能に近い。

★ 即時処理

世俗的な雑事の重圧を切り抜けられるか それは原則的には実に簡単であります。それは「すぐにその場で片づける」ということであり、「即刻、その場で処理して溜めおかない」ということこそ最上の秘訣であって、おそらくこれ以外には、如何なるコツも秘訣もないといつてよいでしょう。

★ 仕事の計画

今日の仕事の若干を、明日に延ばした場合の「明日」と、今日為すべき仕事の一切を仕上げてしまった場合の「明日」とでは、同じ明日であっても、その内容はかなり大きく違うといつてよいであろう。

(森 信三先生

『運命を創る一〇〇の金言』より)

《わたしのハガキ道》

林 秀宣

私自身は、はがきの実践者ではないのですが、これまでにいただいて嬉しかったはがきはあります。

それは、毎月毎月、自宅に送ってくださるはがき通信、「いのり通信（中川千都子氏発行）」である。あの縦書きの「いのり通信」は、毎月彼女の身の上起こった出来事を中心として、それをどのように感じ対処したのか。そして、自分自身に置き換えて、「私なら、こうしただろう。」「中川氏のように感じ対処することができたろうか」等々。

毎月、一枚のはがき通信を読み終える時、不思議なのだが、中川氏と距離が近くなったように感じるのである。顔が浮かんでくるのである。そして、ハガキを書く事は、実は「自分自身と深く向き合う」行為なのだと思付く。

古来より、日本人が時を超えて無意識に育んできた、私たちの頭の中にある知恵、「お互いさま」の精神性を想起させてくれるのである。

森信三翁が

「たった一枚のハガキで、しかもたった一言のコトバで、人を慰めたり、励ましたり出来るとしたら、世にこれほど意義のあることは少ないと言えましょう。」と仰った真意は、恐らく、この日本人の精神性、この日本が紡いできた文化、伝統、顔が見える、誰一人も取り残さない価値観、誰もが誰かに助けられて生き、助け合って生きてきた共同体的精神性の存在。私たちが受け継いできた、他者を思いやる想像力と知恵を使って、支え合う豊かなコミュニケーションをきつと先人たちは、「ハガキ」という道具を使って培ってきたのだと思う。日本社会は、否世界は問題山積であるが、精神を落ち着けて、自分自身と深く向き合う崇高な文化・伝統である。「ハガキを書く」とは本心の開発であり、本

来の自分に戻る、いわゆる自分自身の中にある他者を慮る日本人精神を湧出させる術なのである。

《塾生の本棚から》

古田修平

『君と会えたから』

喜多川 泰著

六月十一日、喜多川泰先生の講話を初めて聴きました。なぜか納得し、買った本を読んでみよう、帰ってから早速、読み始めました。

物語風で、面白そうだなあとしながら、読み進めていくと、人生で必要なキーワードがたくさん出てきます。物語の主人公は、三十七歳の男性で、十七歳の高校生の時の話の回想という設定です。高齢者の仲間入りの私が、読んでいく中で、主人公の十七歳になっていく。大阪から神戸へ行く阪急電車の中であつという間に目的地についてしまいました。

本の内容は、主人公ヨウスケ君と、ハルカとの出会いとそこから生まれる会話が主で、途中で項目があり、その項目は、第一講から第六講まであつて、それぞれテーマが設定されていて、主人公のヨウスケ君とハルカの会話の中にテーマが織り込まれていて、その内容に引き込まれていき、なぜか、そのテーマを達成しようとする自分がいます。

十七歳の主人公のヨウスケ君が感じることが、過去の自分自身と重なり、次の展開へと進んでいきます。読んでいく中で、最終的にどうなるのだろうかと思像しながら第六講が終了し、次のステップに進んで行き、結果的に想像していたようなストーリーに近い結末となりました。でも、その想像することで、早く読み終えたいと思ってしまいました。

この本は、何を教えてくれたのだろうか、改めて考えてみますと・・・

「今日を生きているという素晴らしさに感謝し、今日一日を精一杯生きる」ことだと思えます。喜多川泰先生の他の本も読もうと思っています。

『はがき道に生きる』

坂田道信 著



「ハガキですよ。

蚕がまゆをつぶぐように、せつせとハガキを書いてるうちに私の人生は変わってしまったんですよ」

ハガキ道の伝道師 坂田道信さんの言葉です。

坂田さんは、昭和46年森信三先生のお話を聴いてから感銘をうけハガキ書きをはじめたそうです。

森先生は、講演の最後にこう言われました。

「義務教育を終えた者なら、最低三つのことは実行しなさい。

一つは、あいさつ。

もう一つは、お辞儀。

三つめは、ハガキを書くこと。」

そして講演の会場で「複写はがきの元祖」徳永康起先生と出会い、複写はがきをプレゼントされました。

坂田さんのはがきを書く環境はこうして整いました。

始めは辞書を引きながら一枚のはがきに、最低3個の漢字を入れようと格闘しました。

そのうち「はがきの筋肉」が付いてスラスラ書けるようになり、1日30枚のはがきを書くことを自分に課しました。

返事も全国からやって来て、悪い気はしません。

こうして、はがきを書き続けて、いつしか慢心するようになったころ、仏通寺の北村慧光和尚にこう云われたそうです。

「はがきを書くものではなく、書かせていただくのですよ。

書くことは相手の方の幸せをお祈りすることなんです。」

そう、はがきを書くことで自己満足に陥っちゃいけない。はがきを書くということは、相手の胸をお借りして、自分自身の内面を見つめ、深めることなんだ。はがきの世界は深いですね。

とくに「複写はがき」は、普通のハガキより千倍の値打ちがあるそうです。

エッ!!、どうして?

それは「ハガキ道」を実践し続ける中で、答えを見つけて下さい。



《人間学塾・中之島》次月日程

【8月日程】

第十期「卒業式」

◆ 日程 8月13日(第二土曜)

受付 午後0時～

開式 午後1時～

終了予定午後3時頃

◆ 会場 大阪市中央公会堂

大会議室(地下一階)

◎ 第11期への申込(継続は、

お済みですか。

天下第一等の師につきてこそ、

人間も真に生き甲斐ありと言うべし

森 信三



この一語に接する毎に、我が身の至福を痛感せざるを得ない心境に導かれます。

森 信三先生は、最晩年におきまして、「あなたとは、生前の因縁によって結ばれた」とも、仰言

て頂き、勿体なき至りと感愛いたしました。思えば「無能無才にしてこの一道につながりし」お陰により、先師の道縁につながるもろのご縁を賜り、もじ通り全くの幸齢者として忝い至りで、師恩深重を痛感するばかりであります。

寺田一清

《芳信抄》

埼玉県 山下武彦様

神渡良平先生は、三年前に八時間に及ぶ心臓の手術を受けて立ち直り、七四冊目のご著書『人生を育てる道』をお書きになったとのこと、「沈黙の響きを」を感じられて、そのお力を振り絞ることができたのでしよう。先生の着眼点のすばらしさには、いつも深いものを教えられます。五年前中学の恩師林 芳和先生のお導きで、「実践人全国大会」に参加させていただきましたが、森先生を支えるようにして何本かの柱のような方々が居られ、そのお一人に徳永康起先生が居られて、校長を辞されてからの学級担任として「五木」の時代をよく森先生からも語られましたが、初任地でのご指導も光っておりますね。

埼玉県 大出雅一様

「沈黙とは音がないのではない。響きがある。自分の耳を澄ましておれば、その沈黙の向こうからメッセージが届いてくる」これは神渡先生の命に関わる大手術の後に発せられた魂の叫びだと思えます。

響きからくるメッセージとは、ものごとの本当の姿だと思えます。いま、目に見えている姿は仮の姿で、真実の姿は、その裏にあることが時にある。徳永先生の受け持たれた柴藤くんや、女生徒に先生は沈黙のメッセージを聞かれた。それは、先生の感性であったと考えます。人を育てるのが教育の最大の使命であると改めて気づかせていただきました。

愛媛県 桂 誠司様

神渡良平先生、心臓の大手術から、お元気になられ、大変よかったです。先生のお話しはいつも、重要なことを具体例を挙げて、分かりやすいです。

宮城県 加藤秀夫様

神渡先生の抄録また感動語録を拝読して、徳永康起先生の教育実践を通じて改めて宇宙から送られてくる魂のメッセージを聴く鍵を与えられていくことに感動させられました。

愛知県 坂部智一様

沈黙がメッセージを伝える。一緒にいなくても、遠くで見守ってくださいる方、同じ方向を向かって歩いている人の心の声を感じ感謝して一步一步着実な生活をしたと思います。

次男がまだ小さく一緒に寝ています。時々じやれるように寄ってきます。元気に遊んでいます。心つつと受け止めるのも大切なと思いました。心の充実となります。

岡山県 柴田久美子様

神渡先生のおことば、三〇年経つ看取り活動、神秘の扉が開かれることと希望を頂きました。

NHK 視点論点の収録が6月24日に済ませました。放映の予定は、7月11日お昼12時50分からご覧ください。

この度、NHKの番組に出演させていただきます!!

NHK 視点・論点

「尊厳ある最期を看取る」

出演：日本看取り士会 会長



柴田 久美子

放送日時

2022年7月11日(月)

お昼12時50分より

NHK Eテレ(旧教育テレビ)にて

(再放送)

2022年7月12日(火)

早朝4時より

NHK 総合テレビにて

是非ご覧ください!!



岡山発祥の活動について全国へ発信させていただきます!!